

第 9 回 ITS シンポジウム 2010 ～歴史と伝統の街・京都から考える ITS～

～論文数・参加者数とも増え、活発な議論と地元特徴、成功裏に終了～

1. 概要:

第 9 回 ITS シンポジウム 2010 は、「歴史と伝統の街・京都から考える ITS」をテーマに、2010 年 12 月 10 日(金)、11 日(土)に京都大学百周年時計台記念館で開催、北海道から九州まで全国から 330 名が出席し、議論も大変活発で成功裏に終了しました。論文数・参加者数の目標である 90 編、300 名に対して、論文発表 109 編(過去最大)、330 名という結果となりました。4 つの企画セッション、2 つの対話セッション、バンケット(約 80 名)を通じ、活発な議論と異分野融合のネットワークが図られ、十分な成果をあげる事が出来ました。参加をくださった方々と登壇者、論文発表者、モデレータの皆様、プログラム委員会メンバー各位、そして会場を提供いただいた京都大学に感謝いたします。

企画セッションでは、企画セッションは、環境・健康・観光、新エネ・省エネ、高齢者支援、移動モード多様化の 4 つの視点で、ITS の貢献や課題について講演とパネルディスカッションで幅広く議論を行いました。京都の特徴を活かした「環境・健康・観光」のセッションは、「歩くまち・京都」憲章を推進されている地元行政の ITS 関連施策、交通と健康の関わり、観光おもてなしにおける ICT サービス、公共交通と ICT などについて、市民の方々に理解していただく機会ととらえ、市民参加セッションとして公開しました。

論文を発表する対話型セッションは、109 編の論文を、A 地域・エネルギー・環境、B 安全・ヒューマンインターフェース、C 交通ネットワーク、D 車両・地図・センシングの 4 つに分類し、2 日間にわたり発表を行いました。セッション後半(30 分)はモデレータの司会による公開討議を行い、発表者と聴講者の間で質疑を共有し、議論を深めました。

論文数は、109 編と過去最高を記録し、大学の伸び(昨年比 22%増)が大きく、内容では、地元、関西空港・奈良県から初めての投稿があり、ITS スポット・首都高速大橋ジャンクション・隊列走行・長崎 EV&ITS・パーソナルモビリティ・スマートフォン等の最近の話題と、ITS の経済性、大脳白質病と運転挙動の関係を取上げた論文など経済・医学分野まで ITS の裾野の広がりが感じられました。

2. 開会式:

開会式では、実行委員長の京大の大西有三副学長と ITSJ 渡邊浩之会長が挨拶された。大西副学長は、京大に工学系と医学系を融合させた「安寧の都市」ユニットを開設し、健康で生き生きと活動できるまちづくりの研究が積極的に行われ、ITS を活用した都市政策の展開が中心的なテーマであること、数多くのベンチャー企業が生まれ育ち新し物好きな京都で、最先端の技術が議論される ITS シンポジウムを開催する意義は大きいと述べられました。

渡邊会長は、シンポの趣旨と期待、最近の ITS 世界会議でのトピックス、人や車が交通インフラとネットワーク化され情報が集約・活用されエネルギーや交通・産業・市民生活全体をマネジメントする次世代社会システム中で ITS が重要な役割を果たすこと、要素技術からシステムで大きく育てることが大切と述べられました。



大西副学長



渡邊会長



百周年時計台記念館



開会式

3. 企画セッション:

①企画セッション 1-1 「モード多様化によるサステナブル交通社会の実現」

- ・モデレータ: 土井勉教授(京大)
- ・パネリスト: 土井勉教授(京大)/吉井稔雄教授(愛媛大)/
吉本隆一所長(JILS)/大西啓介社長(ナビタイムジャパン)
- ・論点: 省エネ、サステナブルな交通社会実現に向けて、自動車からエネルギー負荷の小さい他の交通モードへの転換が重要で、そこに ITS 技術を活用。モードシフトを促す、情報提供、物流の効率化の視点で議論されました。

②企画セッション 1-2 「ドライバを支援する ITS

～運転能力の低いドライバを ITS 技術で支援すべきか?～

- ・モデレータ: 稲垣敏之教授(筑波大)
- ・パネリスト: 中野倫明教授(名城大)/古川修教授(芝浦工大)/
田中宏明部長(トヨタ自動車)/喜瀬勝之主査(富士重工業)
- ・論点: 能力の衰えを補う運転支援、運転能力自体を維持・向上させる仕組み技術について具体的な取組の紹介と技術でカバーすべき範囲や技術が抱える問題点などを議論いただきました。気づくチャンスを与え支援が過剰にならないように、システムの限界を正しく理解してもらうことなどが論点でした。

③企画セッション 2-1 「歩くまち・京都」実現への ITS の貢献」(市民公開セッション)

冒頭、門川大作京都市長が挨拶され、「Do you Kyoto?」という言葉で京都議定書の履行を世界に発信していること、環境モデル都市・観光モデル都市実現のためにも ITS が大切な要素で、EV 研究や P&R など CO₂ 削減の施策を実施中であること、京都議定書誕生の街で、ITS シンポジウムが開催される意義と期待が述べられました。



門川京都市長

・モデレータ: 谷口栄一教授(京大)

・パネリスト: 野本慎一教授(京大)/原良憲教授(京大)/

水田雅博交通政策監(京都市)/西田純二社長(社会システム総合研究所)

・論点: 自動車は都市交通に不可欠な側面があり、自動車交通と人と公共交通とのおりあいが重要な課題。ICT-ITS 技術でどのようなイノベーションが可能か、ITS 技術で生活・行動が如何に豊かになるか、ユーザーの視点・技術やサービスの提供者の視点・まちづくりのコーディネーターの視点で議論されました。

④企画セッション 2-2 「新エネルギー・省エネルギーに関わる ITS」

・モデレータ: 須田義大教授(東大)

・パネリスト: 堤敦司教授(東大)/須田義大教授(東大)/

上田昌則エキスパートリーダー(日産)/杉本和敏技術理事(IBM)

・論点: エネルギー供給者と需要者の連携が必要で、省エネ問題に対する ITS からの貢献を挙げ、産業政策の視点で議論。交通分野の ITS 技術とエネルギー情報技術の連携が必要で、そこに ITS が大きな話に展開できる可能性がある。情報の付加価値加工が鍵を握る。要素技術をつないでイノベーションを。固有技術はすぐに追いつかれるので、システムアーキテクチャーで頑張ること等が論点となりました。



企画セッション

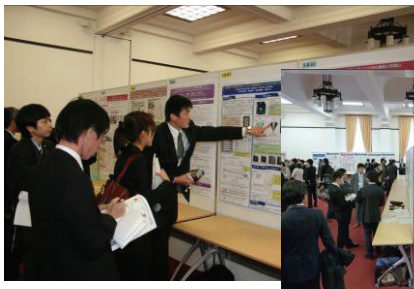
4. 対話セッション(ポスターセッション):

2日間で109全論文が発表されました。30秒ずつの概要紹介の後、ポスタープレゼンを90分間、その後モデレータの司会による30分間の公開討議を行い、聴衆と論点を共有し、より深く議論を高めることができました。女性の研究者も増え、外国人の発表もあり、発表者と聴講者の間で活発な議論が展開され大変有意義なセッションとなりました。

今回は会場が広く、混雑が避けられたため、発表者と十分な意見交換を行っていただくことができました。プレゼンの技術の一層向上し、魅力あるポスターの作成への工夫が感じられました。また、全国の大学のITS研究が一堂で見られ、自分たちの研究との比較やITSの広さが体験でき、このシンポジウムは非常に有益とのご評価をいただきました。

ベストポスター賞

大学・企業から構成した2名の審査委員(合計16名)が4分間の質疑を通し総合評価をし、学術部門5つ、技術部門3つのベストポスター賞が選ばれました。



ポスター発表



公開質疑



ベストポスター審査

受賞された論文と発表者の方々は以下の通りです。

<学術部門>

1-A-05*「感度解析によるオンデマンドバス運行計画アルゴリズムの評価」

坪内孝太(東京大学)

1-D-08*「車載カメラ映像の時空間マッチングを利用した自車位置推定」

小野晋太郎(東京大学)

2-B-01「運転時の高齢ドライバの視覚・認知機能の測定と運転能力評価」

大石裕介(名城大学)

2-C-01「物流事業者の行動を考慮した都市物流施策の評価に関する研究」

山羽佑樹(京都大学)

2-D-01「反射特性の入射角依存性を考慮した全方位偏光画像による路面状態認識」

中川和哉(富山大学)

<技術部門>

1-B-06*「視知覚情報にもとづく道路シーケンスデザインによる走行制御効果の検証」

韓亜由美(東京大学)

1-C-14「路側センシング情報を用いる交通事象検出手法の評価」

江村恒一(パナソニック株式会社)

2-A-08「新技術活用による公共交通の利用促進について

～地上デジタル放送を活用したデマンドバスの取り組み～」

香野雅之(道路新産業開発機構)

5. バンケット:

12月11日のプログラム終了後に開かれたバンケットでは、産官学の関係者、登壇者、発表者の忌憚のない意見交換の場となり研究・ビジネスに向けたネットワーキングが図られ貴重な機会となりました。

6. 閉会式:

閉会式では、プログラム委員長の京大谷口栄一教授と来年のプログラム委員長の東大の原田昇教授が挨拶されました。

谷口教授は、論文数・参加数とも多く盛況であったこと、研究が広がったこと、スローライフ的なITSを考える機会となったこと、若い研究者が多数参加したことで将来期待できること、ITSを要素技術からシステムでより大きく育てるヒントを与えてくれた等の総括と関係者への感謝を述べられました。

ベストポスター賞の表彰状授与された後、原田教授が、来年の会場と日程を発表、価値創造型のITS、新産業や新しいくらし・街を作るITSについて、ITSシンポジウム10周年に相応しい魅力的なプログラムで熱い議論をしたいと述べられました。



谷口教授



ベストポスター表彰式



原田教授

7. 来年の開催:

ITSシンポジウムは、学術研究と企業の研究が連携する機会を発掘出来る場としてITS Japanが産学連携活動の柱と位置づけているもので、論文発表と活発な議論を通じ、異分野や地域との幅広いネットワーも図られ今回も十分な成果があったと思われます。

将来、ITS Japan のプロジェクトに繋ぎ、発展させることが出来るポテンシャルのある論文も見受けられ、この成果を有効に活用したいと考えます。今回の企画セッションでは、課題解決への具体的提示やコスト分析などに不十分なところや対話セッションでは、類似したテーマで切り口の違う論文のグループ分け、企画セッションとリンクなど改善すべき点もあり、アンケートに寄せられた貴重なご意見と共に、次回以降の企画に反映させ、一層魅力ある有意義なシンポジウムを目指したいと思います。

ITS 研究論文が一堂に聴講できる機会は、このシンポジウム以外では体験できないので、研究者にとって自分たちの研究との比較や新しいアイディアの発見にもつながり、直に研究者と議論できることは将来の研究に活かせることが期待されます。

以上